

## 崔氏政權と官僚層

— 崔氏政權下の李奎報の在り方によせて —

朴 菖 熙

一一九六年五月崔忠獻がおこしたクーデターは、四代六十余年間の崔氏政權の成立をもたらす契機になった。では、崔忠獻にはどのような条件が具備されてその政權の基盤をつくつたであらうか、また、政權はどのような特徴をもっていたであらうか。私はそれらの条件・特徴はつぎのようなものであると考える。

一、崔忠獻は李義政を倒した。明宗末期の李義政一派は朝野からもっとも嫌悪された存在であった。とくにかれの弑王の罪は、西京の趙位寵がこれを追及するため挙兵するという名目になつたほどであった。二、クーデターの主謀者は、崔忠獻兄弟および忠獻の甥朴晋材、族人盧碩崇等数人の親族にすぎず、一一七〇年、鄭仲夫・李義方らのクーデターのときのような多数の武官による集団的規模とは対照的であった。このことは後日崔忠粹・朴晋材が除けられてから、クーデター決行の功績が崔忠獻の一身に帰するようになったことと合せて重要なことである。三、鄭仲夫とちがって、崔忠獻は有能な武官であつ

た。そしてなによりも社会改良について問題意識をもっており、封事十条が示すように当時の支配層＝官僚層として必要なことを認識していた。これらは官僚層の指導者として必要なことであつた。四、明宗末期に、奇洪寿・崔訖・任濡・崔謙・趙永仁らの良心的官僚の一派が高官としてあつて、クーデター後直ちに崔忠獻と合流した。このことは鄭仲夫・李義方らが無知で貪虐な武官らの弱体執政府をつくつた政權と性格のちがいを示すことでもある。五、明宗時代に政界から身を引いていた儒官、新しい政治状況の到来を待望した若い儒官らが多数存在し、崔忠獻はかれらに官吏として生計および活動の条件をつくつてやり、かれらを自己の周囲に結集させた。六、崔忠獻は志謙を王師に迎え、牧牛子をして曹溪宗を開宗させ、名高い僧侶とその活動を国家の宗教政策のなかに組み入れていった、かれは佛教の興隆をはかったのである。七、前王の廢位と新王の迎立により、王との直接の対立をなからしめ、かれ自身は王から公認された職位と財富とを獲ることができた。八、家兵集団を養い、つねに軍權を掌握していた。

以上でわかることは、崔忠獻は少数の親族でもって当時の否定的勢力—李義政一派を倒し、前代の良心的高官や新進の儒官ら、そして名僧を自己の周囲に結集させて、迎立した王から公的に權威を保証されて、家兵集団を武力の基盤にし富貴を追つていたということである。

この崔氏政權を支えていた良心的・革新的官僚層は、崔忠獻が執權の初期に三十年來の農民の蜂起をいったん鎮圧し、契丹

遺種に対する挙国的反撃と勝利をもたらしたことに對し、かれらは崔忠獻の執権の妥当性を更めて確認したと考えねばならぬ。

しかし、崔氏と官僚層との矛盾は厳存していたのであって、それらは国外からの侵入に際してはとくに大きく露呈するのであった。契丹遺種の侵入・蒙古の侵略に際しての金就勛・趙冲や金良鏡のあり方、朴犀・金慶孫・崔椿命・金世冲等のあり方と崔忠獻および崔瑀のあり方との根本的相違はかれら官僚が自身を完全に高麗の国土保全のために挺身するのに比して、崔氏はたとえ国家的危急のばあいにいたっても私的な人・物的力量を確保しようとするのである。そしてこのような官僚の一人についてみれば、崔氏における執権者としての公的性格および私的権力行使の間の矛盾は、崔忠獻がクーデターを遂行した国家的功績にたいする王および官僚層による公認と関つて、結局、崔氏政権に参与する限り、その官僚を執権者の公的権力行使における私的性格の中限定づけてゆくことになるのである。

私はこの問題を究明するための一つの試みとして当時の良心的官僚の典型として李奎執をとりあげ、時の農民蜂起に關つてのかれの社会観および行動性が、崔氏政権への参与に仕官就職に際しいかにゆがめられていったかについてみた。

李奎報の三十歳(明宗二十七年)までを李相国全集から見たばあ、主として三つの問題があるようにおもふ。一つは、生

計の問題、すなわち職に就くということ、一つは社会秩序の紊乱に對する憂いである。これは農民蜂起の鎮圧の問題となつて出ている。最後に、官僚自身の自家肅清のことで、これは貧富の差・貪官のばつこに對する官僚の責任追及の問題である。ここでは、農民蜂起に對するかれの考え方・對し方を示している。それによつて他の二つの問題がまた説明されるかとおもう。

かれが二十六歳のときの詩に「聞江南賊起」がある。すなわち、

自聞群犬吠高聲 匣劍無端白日鳴  
闕下牽來應有士 官家何惜一長纓

とあつて、蜂起した者に對する一徹な憎惡心と、かれら「群犬」を直ちに討伐しえない官廳に對しむしろ非難の聲をあげているのをきく。李奎報の農民蜂起に對する憂い・憤懣は、「(明宗二十六年)八月五日聞群盜漸熾」(二十九歳)においても讀むことができる。すなわち、

群盜如蝟毛 生民酒腥血 郡守徒戎衣  
望敵氣先奪 尚未掃蜂毒 况堪探虎穴  
嗟哉時無人 誰繼來嘯鑿 賊臂捷於猿  
放箭若星瞥 賊脛迅於鹿 越山如電滅  
士卒追不反 聚首空呀咄 幸能觸其鋒  
物故十七八 婦女哭夫壻 鬢首吊枯骨  
荒村早關門 白日行旅絕 今年况復旱  
望雨於甚渴 田野皆赤土 未見苗芽茁

富屋已憂飢 貧者何由活 朱門日吐茵  
 百爵耳自熱 高堂森玉簪 密席擁盡襪  
 但識門燻灼 不憂國控扼 腐儒雖無知  
 流涕每嗚咽 嗟非肉食徒 未掉直言舌  
 已矣若爲陳 天陸無由調

とあって「群盜」の活動の激しさが示され、民・村の被害を深く傷む心情があらわれており、守令の無気力や「朱門」の腐敗自墮落なさまが強く非難されている。これら憂うべき事態をただすために、かれは王への直言を考えている。ここでは「群盜」の正体に対する推考や、乱がおこる原因についての考察は見られない。暴徒は専ら、即時討伐さるべき対象としてあり、かれとは完全に敵対関係に置かれている。

ところで現地ではどうであつたらうか。明宗二十五年前後期の南部地方は各地の「守」が「貪殘屠剝なため民はその苦しみに堪えない。」あるいは各処の「富強而班」が古来の丁田を劫奪しており、勢家・吏が民に限りなく疾苦を与えているという記録は「高麗史」では随処に見られるのである。このようにただ搾取され抑圧されている無権利な民が生きてゆくためには起ち上がる以外に道がないことを示している。しかも、たとえば明宗二十四年に密城では七千余人の「暴徒」が官軍に斬られている。以上のような状況の下で展開している農民蜂起に対し、李奎報は完全に支配者層の立場に立っている。かれはなによりも民が武装して官家に抵抗することの正当性を肯定するわけにはいかなかった。かれの憂國の情はむしろかれら暴徒の鎮圧に身

をもつて赴くことで表現される。要するにかれにとつてもっとも重要なことは王朝体制の安定であり、各地の民乱や官家の誅求により苦しむいわゆる良民たちの安寧である。このことは時の執権者がたれであるかに関りのないかれの終生変らない社会思想であつたわけだ。

こうして李奎報が三十五歳(神宗五年)のとき、暴徒鎮圧のために進んで参戦したのは当然のなりゆきであつたといえる。すなわち年譜では

壬戌冬十二月東京叛、与雲門山賊党拳兵。朝廷出三軍征之。軍幕逼散官及第等、充修製員。歷三人、皆以計避不就。至公慨然曰、予雖懦怯、亦國民也、避國難非夫也、遂從軍。於是幕府欣然、奉爲兵馬錄事兼修製。

とあるが、李奎報の任務の一つは現地の津の竜王や山神に祭文を書き「義庇・孝心・勃佐之党」の蕩滅を祈ることであつた。さて、以上、私は李奎報の農民蜂起に際してのあり方を見てきたが、時の執権者はこのような李奎報を特別に評価するのでもなかつた。そこにかれの悩み・不満があつた。三十七歳で「凱旋」したかれは、戦功を彰されず、四十歳まで就職を待たねばならなかつた。すなわち、

參謀軍幕強三載 浪迹京華又一春  
 狷龍論功誰第一 至今不記指蹤人

(卷十二復京後乙丑三月遇征東軍幕旧寮贈之)  
 とあって、かれは翌年、求官の書を崔訖に出さねばならなかつた。こうして直翰林院に権補されたのだが、その間のいきさつ

について年譜では、

「公既陞沈、杜門不出。然、每歲史館・翰林・國學等、儒官薦人常以公爲首。又左右多有揄揚者。晋侯庚重違衆志、有用之意、嫌其無因。時方構茅亭、命李仁老・李元老・李允甫、及公作記。仍使儒官宰相者科公爲第一。」

とある。この「茅亭記」で李奎報は、崔忠獻の邸を「門千戸万、若麟錯櫛比、而特控引形勢、螭起鳳舞」と示し、崔忠獻個人についてかれは、「而爲公之用者衆矣、非独物也。其陶治生人、亦可謂周矣。孰有不願爲公之用者耶」と述べており、さらに亭の頌詞に、

亭翼然	鳳將鶩	誰其營	我侯賢
侯式宴	酒如泉	奉觴酢	客指千
何以醉	壽萬年	山河轉	亭不遷

とした。これらの文から李奎報の崔忠獻の榮華に対する皮肉な心情を見てとれないことはないにしても、すくなくとも表面上、かれは崔忠獻に心酔していると思えるをえない。豪華な茅亭のなかでの宴会と先述の「朱門日吐茵」および百姓の疲弊・民の蜂起を、かれは内面において一体どのようなつながりをもたせているのだろうか。私には、ここにこそ彼の盲点が潜んでいるのではないかとおもうのである。つまり自身が官職に就く必要を前提にして執権者に接する李奎報からすれば、自身の詩才をあるばあいには相手を喜ばすための手段に供することも考えられないわけではない。李奎報としてできることは一般的に貪官を呪い、具体的には崔氏以外の者に対して皮肉を浴びせる

より致しかたがない。その上、当時の開京在住の官僚層にとつてとくに崔忠獻は国家の功臣であり、かれらに政治的文化的活動の可能性を与え、その身分および生計を保障している執権者であったから、なおさら崔氏に対しまず敬意を払うのでなければならなかった。

こうして執権者の崔忠獻に対して李奎報は私的なつながりを通じてでなければ自身が官職に就けないわけで、そこに李奎報のみならず当時の良心的・革新的官僚層の問題があった。

しかし、結局は、官僚層自体がそれぞれの経済的地盤を持たず、ただ高麗王朝の公田制下の寄生的官僚として存立する以上は崔氏にひきづられてゆくことにしかならず、良心的・革新的官僚層自体の主体性は、遂に生かされなくなるのである。

つぎに私は高麗への蒙古の侵略に際して、崔氏政權と官僚層、そして李奎報のあり方について考察したのだが、これは別の機会にゆずることとし、本論稿ではただ、崔氏政權を考へるばあいにそれ自体の文化的伝統と社会的連帯をもつ高麗の広汎な官僚層についての説明が是非とも要請されるものであることを指摘するに止める次第である。

(注) 李元老・金君綏・李公老・金良鏡・李允甫・林椿・陳湮・全履之・李奎報・兪升且・金徹・趙冲・崔宗峻・琴儀・朴仁頌・金就勛等、高麗史列伝および李相国全集に見られるかれらは詩儒・文武官であつて良心的・革新的官僚層を形づくっていた。

(一、橋大学大学院学生)